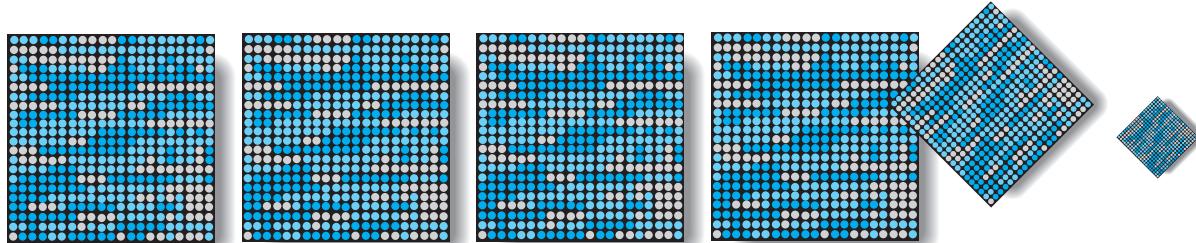


JAPANESE SOCIETY FOR BIOINFORMATICS



## 日本バイオインフォマティクス学会ニュースレター 第4号

学会ホームページ <http://www.jsbi.org/>

### ◆ C O N T E N T S ◆

[卷頭言] .....	2	· Message from International Society for Computational Biology	
[研究会およびワーキンググループの紹介] .....	2	[学会議事録等] .....	6
·バイオシミュレーション研究会		·第5回評議員会議事録	
·教育カリキュラム検討ワーキンググループ		·第7回幹事会議事録	
[GIW2001レポート] .....	4	·平成13年度総会資料	
·GIW 2001レポート		·評議員選挙結果	
·Oxford University Press Bioinformatics Prize		[学会の現況] .....	11
·GIW 2001 Report		·役員一覧	
·GIW 2002のお知らせ		·賛助会員一覧(2002年1月20日現在)	
[ISCBからのメッセージ] .....	6	[編集後記] .....	12

## 卷頭言

最近このような卷頭言を書く機会が増えた。卷頭言に限らず、「編集にあたって」や「序」なども書くことが多い。これは原稿だけに限った話ではない。種々の研究会、講演会、懇親会における挨拶もしかりだ。これは私が単に年をとってきて、このようなことを依頼される立場になったということだけではなさそうだ。思い出してみると、10年前からこれに近いことをして来た。最近、回数が増えたので、このような印象を強くしただけのようだ。回数が増えた理由は言うまでもないであろう。バイオインフォマティクスの隆盛に伴って、これに関連した出版物、会議、講演会などが急増したからである。

さて、このようなことを書いたのは、私が10年前から偉かったということを言いたいためではもちろんない。また、若い人がだらしないから、私がいつまでもこんな仕事を引き受けないといけないのだということを言いたいのでももちろんない。これを言うなら論理が逆であろう。むしろ、若い人が頑張っているから私は偉そうにしていられるのだから。

しかし、卷頭言を書いたり、会議で挨拶したり、講演や原稿を頼まれたりしていると、何となく自分が偉くなったような気がしてくるから不思議だ。でも一方で何かが違うぞという気がして、なぜか素直に喜べない。その理由は、「たまたまバイオインフォマティクスの発展期という時代に遭遇して、たまたまそういう立場にいたということに過ぎないのではないか。バイオインフォマティクスが発展し重要性が高まったことを、あたかも自分がそれに対して何か大きな貢献をしたかのように錯覚してはいけないのではないか。」と思う気持がどこかにあるからである。これは私だけでなくひょっとしたらわが国におけるバイオインフォマティクスのコミュニティ全般にもある程度当てはまるのではないか。

新しい学問の黎明期や勃興期には、われこそがフロンティアを切り拓くという大いなる情熱や大いなる自信(じつは多くの場合勘違いであるが)がなくてはならないが、バイオインフォマティクスも、その実態はともかくとして、ここまで発展普及してくると、もっと言えばここまで過熱してくると、そろそろ冷徹な目でながめることが必要に

なってきたように思う。

研究者であれば、バイオインフォマティクスはそもそもどういう学問であるのか、それに対して自分はこれまでどのような寄与をしてきたのか、そしてこれからどのような貢献ができるのか、また、そのためには今後どのような技能や知識を身につけなければならないのかなど、冷静な目で自分の足下をそして未来を見つめる時期に来たように思う。また、企業人であれば、(企業活動については門外漢であり、間違っているかも知れないが)バイオインフォマティクスはこれまでにどの程度の効率化ひいては利益をもたらしたのか、また、今後もたらす可能性があるのか、そのためにどのような投資や技術開発をこれからなすべきか、などを落ち着いて見積もることがいま求められているのではなかろうか。



うまくは表現できないが、最近、暖かくてふわふわした空気がバイオインフォマティクス全体を取り巻いていて、その中にいると、大変に心地よく感じられる。周りからちやほやされて何だか自分までが偉くなった気になってくる。いつまでもこのような感情に浸っていられるならそれはそれで幸せかもしれないが、このようなバブルとも言える状況はそうは長続きはないのではなかろうか。そうなってからいろいろと考え始めたのでは手遅れになりはしないだろうか。決して、バイオインフォマティクスへの期待や若い人達の情熱に水を指すつもりはないが、さらなる発展のために、たまには日々の忙しさから抜け出し、走り回るのをやめて少し立ち止まってみてはどうだろう。そして僭越ではあるが上に述べたことをちょっと内省してみてはいかがだろう。これは全力疾走をちょっと中断するだけだから一見簡単そうに思えるがじつは相当つらい作業になると思われる。しかし、このようなつらいことを乗り越えることを通してしか真に新しい学問は生まれないように思う。

高木 利久(東京大学)

## 研究会およびワーキンググループの活動報告

### ■ バイオシミュレーション研究会

富田 勝(慶應義塾大学環境情報学部)

#### ●13年度の活動報告

13年度のバイオシミュレーション研究会は慶應義塾大学先端生命科学研究所オープン記念シンポジウムと共に、2001年10月20日と21日に慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(山形県鶴岡市)にて行われた。約200人の参加者を集め盛況であった。

講演者は以下の通りである(敬称略): 金久實(京都大学)、五條堀孝(国立遺伝学研究所)、久原哲(九州大学)、林崎良英(理

化学研究所)、富田勝(慶應大学)、清水和幸(九州工業大学/慶應大学)、西岡孝明(京都大学/慶應大学)、森浩禎(奈良先端大学/慶應大学)、小笠原直毅(奈良先端大学)、板谷光泰(三菱化学生命研究所/慶應大学)、小原雄治(国立遺伝学研究所)、小長谷明彦(北陸先端大学)、宮野悟(東京大学)

詳細は以下のURLを参照:

[http://www.ttck.keio.ac.jp/news/opening\\_event/](http://www.ttck.keio.ac.jp/news/opening_event/)

## ●14年度の活動予定

### Biosimulation Workshop (SIGSIM02)

2002年8月3日にISMB02 (<http://www.ismb02.org/>)のサテライトミーティングとしてカナダのEdmontonで開催される。SIGSIM (Special Interest Group of Biological Simulation, International Society of Computational Biology)との共催。

**Program Committee:** Hamid Bolouri (University of Hertfordshire), Dennis Bray (Cambridge), Doug Brutlag (Stanford), Andrea Califano (IBM), George Church (Harvard), Igor Goryanin (GlaxoSmithKline), Larry Hunter (NCBI), Peter Karp (SRI), Hiroaki Kitano (Sony CSL),

Nikolay Kolchanov (Russian Academy of Sciences), Leslie Loew (University of Connecticut), Harley McAdams (Stanford), Pedro Mendes (NCGR), Chris Ouzounis (EMBL), Bernhard Palsson (UCSD), Masaru Tomita (Keio University).

連絡先: [sako@jtbcom.co.jp](mailto:sako@jtbcom.co.jp)

## ●14年度バイオシミュレーション研究会

2002年9月17日～18日に人工知能学会分子生物情報研究会(SIGMBI)と共に開催される。場所は山形県鶴岡市湯の浜温泉予定。

連絡先: 塩澤明子([akiko@ttck.keio.ac.jp](mailto:akiko@ttck.keio.ac.jp))

## ■ 教育カリキュラム検討ワーキンググループ

### 有田 正規(産業技術総合研究所 生命情報科学研究センター)

#### — Making of バイオインフォマティクスカリキュラム —

ある秋の日、理研の多忙なK先生から打診を受けた。カリキュラムのたたき台を作成してみないか。K先生には人工知能学会の研究会SIG-MBIでもお世話になっている。なにより面白そうな作業だ、と思った。そうこうするうち、自分の学位審査の主査で東大のM先生から同じ依頼をされてしまった。学位を取ってはや2年、菓子折り一つ持つてゆかず不義理を尽くした輩には、身に余る大役かもしれない。そんなことから、仕事の大さを知らずに引き受けたのが始まりだった。

まずは各国の教育内容のサーベイに着手した。K先生から主要大学のWWWサイトが入ったExcelファイルを貰った。が、この御時世である。古いリンク集よりGoogleが役に立つ。ほどなく<http://www.bioinformatik.de>を探し当て、各大学のカリキュラムを調べ上げた。情報量は膨大だった。ところが、どんな有名大学の授業でも、バイオインフォマティクスの一部しかカバーしていない。おおかた人材不足と授業時間が原因だろうが、名前はバイオインフォマティクス、中身は配列解析だけ、分子モデリングだけといった授業の多さに驚いた。

教科書もサーベイした。医科研のT研に侵入し、バイオインフォマティクス関連の教科書を片っ端から斜め読み、目次のコピーを取って内容を比較した。近年は実に多くの関連書籍が出版されている。最新刊でもAmazonですぐ検索、購入可能だ。それらの中身を貼り合わせていった。分野の全容が浮かび上がった。

ほどなく、サーベイに基づいたカリキュラム草稿が完成した。K先生の所へ持参すると、異国事情に詳しい理研のY先生も加わった。しかし、明確な構想を持つ二人の手で、草稿は根底から組直されてしまう。バイオインフォマティクスのコースとして、研究者養成とリテラシー教育と二通り用意すること。配列の解析、構造の解析、システムバイオロジーを三本柱にすること。実験系の研究者と協調して学習できる内容を用意すること。(必ずしも実験を必修に含めるわ

けではない。)主要科目は大学院で指導し、学部では基礎科目に徹すること。いま自分で考えても宜なるかな、草稿は教科書目次の真似事に過ぎなかった。とにかく、カリキュラム作りは振り出しに戻った。

学部で指導する基礎科目まで選定することになり、仕事はいっそう大がかりになった。自分が学んだはずの情報科学でさえ取捨選択には頭を痛める。況や生物学をやである。分子生物学の教科書もサーベイに入れ、その他、遺伝学や物理化学の教科書まで引っ張り出した。また、多くの意見を取り入れよう尽力した。お台場CBRCの研究员に草案を日々配り、コメントを強要した。BERIのT先生などはCBRCを訪問したのが運の尽き、カリキュラム作成にとどん協力させられた。

11月中旬、草案を委員会の重鎮が審査する日がやってきた。羽田空港の貸し会議室に集結したのは前出のK先生、Y先生とM先生の他に奈良先端大のM先生、九工大のS先生である。(S先生にはオブザーバーとして参加していただきました。)それぞれ異なる分野出身だけに、さまざまな意見が噴出した。単なる授業項目ではなく、将来も見据えて内容に幅をもたせること。異分野から参入できる入り口を複数用意すること。細かい授業内容でなくその方針を項目とすること。こうした意見をもとに、大学院カリキュラムの授業項目は決定した。また選択科目の項目も、この委員会で大筋が固まった。こうして、カリキュラム案は整ったのである。

わざわざカリキュラム案と書いているように、現在JSBiのホームページで見られるのは未定稿である。これから学会員の声を集め修正、最終的なカリキュラムを作成する段取りになっている。学会員の意見は非常に重要である。学会員の批判なくしては改善は見込めない。(なぜコメントをくれるよう日々に宣伝されていないのだろう?)ここまで読んだあなた、カリキュラム案にコメントして下さい。  
(<http://www.jsbi.org/>)



# GIW 2001レポート

## GIW 2001 レポート

中井 謙太(東京大学)

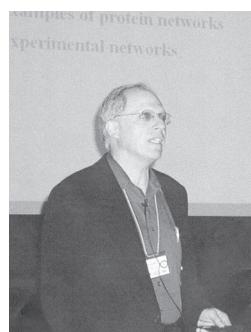
のつけから卑近なたとえで恐縮であるが、日本バイオインフォマティクス学会員にとって、GIWは競馬好きにとっての有馬記念みたいなものかもしれない(私は競馬が特に好きなわけではないので、想像でしかないが)。年末のこの行事が毎年クリスマスの飾り付けの美しい恵比寿ガーデンプレイスで開催され、そこに行くと多くの懐かしい知人に出会い、これが終わると「ああ、今年も終わりだ」というような気持ちにさせられる。そのGIWも2001年末で12回目を迎える、広く親しまれてきたGIWの略称は残したまま、正式名称は、より国際的に開かれた会議として、International Conference on Genome Informaticsに変更された。いまやこの名称は決して大げさなものではない。12年という屈指の歴史を誇るばかりでなく、今回は10カ国から合計726名の参加者を数えた。何よりも、特にこちらから招待したわけではないのに、いわゆる業界の有名人が何人も外国から参加していた様子は、この会議の成熟ぶりを多くの参加者に印象づけたことと思われる。この会議をここまで育て上げてきた最大の功労者は、東大医科研の宮野教授とその研究室のメンバーであると思われるが、特に今回はプログラム委員会の議長を務めたLimsoon Wong(シンガポールKRD)と松田秀雄(大阪大)の両氏の宣伝努力が大きかったと聞いている。

会議で発表された研究の内容などについては、すでにJean-Philippe Vert氏(京大化研)との共著でレポートを書いたし(1)、採択論文は近日中にJSBiホームページから無料で公開される予定なので、詳しくはそちらを参照していただきたいが、これまた海外の有名研究室からの投稿が例年以上に多かったことは特筆に値する。なお、今年の招待講演はDavid Eisenberg (UCLA)とCharles Lawrence (Wadsworth Center)の両先生であった。Eisenberg 氏は遺伝子間のつながりから未知遺伝子の機能を推定するという観点から、最近話題のRosetta stone 法やPhylogenetic profile 法、タンパク質相互作用データベースなどを紹介された。カウボーアハット(?)がトレードマークのLawrence氏は、生物学の研究スタイルが従来のように、仮説を検証するように上手に実験を組むのではなく、組織的に得られた大量データの解析から新しい発見を行うデータ駆動型に変わりつつあることを指摘し、その具体例として、微生物ゲノムの遺伝子制御領域を比較することで推定した転写因子結合部位を実験で確認するという自分たちの研究を紹介した。さらに、Best paper awardには、Richard H. Lathrop氏らの「複数の待ち行列を用いた分枝限定法」の研究に送られたほか、別記事に紹介があるように、今回からベストポスターがOxford University

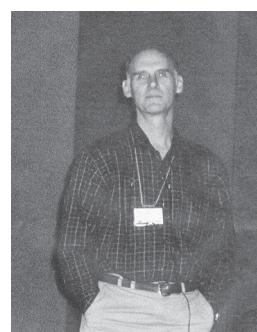
Pressの名前を冠して表彰されることになった。ひょっとしたら自分が選ばれるかも、とぞきぞきした会員もいたかもしれないが、もう少し芥川賞などのように、選考委員が選考経過と理由を述べると良かったように思われた。

最後にGIWの順調な発展ぶりは、ご同慶の至りであるが、これに伴って、永年会場として親しまれてきた恵比寿ガーデンホールがそろそろ収容人員の限界に近づいてきたことは、関係者にとっては次回あたりのうれしい悩みになることだろう。果たして、次回もこの調子で参加者数が増え続けるのだろうか。筆者も次回は無関係とはいっていられないで、少々心配なことではある。

(1) Nakai, K. and Vert, J.-P., Genome informatics for data-driven biology: A report on the twelfth international conference on genome informatics, Tokyo, Japan, December 17-19, 2001, *Genome Biology*, in press



Dr. David Eisenberg



Dr. Charles Lawrence



## Oxford University Press Bioinformatics Prize

Oxford University Pressの寄附により"Oxford University Press Bioinformatics Prize"が日本バイオインフォマティクス学会に

設けられることになりました。この賞は日本バイオインフォマティクス学会年会(International Conference on Genome Informatics,

GIWにおいて正会員及び学生会員によって発表されたポスター及びソフトウェアデモンストレーションの中から1件が選定されるもので、賞状及び賞金3万円及び年会開催年の翌年のBioinformaticsの無料購読が授与されます。

Oxford University Pressからのこの寄附の提案が、GIW 2001の開催直前であったため、表彰規定(案)に基づいて、会長を選考委員長とし副会長、評議員及びGenome Informaticsの編集者からなる選考委員会が、会長により設置されました。表彰規程については平成14年3月の評議員会で正式に承認される予定です。選考委員会では、委員の推薦に基づいて慎重に審議した結果、GIW 2001では、次のポスター発表に対して、第1回Oxford University Press Bioinformatics Prizeが授与されることになりました。

Katsuhisa Horimoto, Hiroyuki Toh ASIAN: Automatic System for

Inferring a Network from Gene Expression Profiles Genome Informatics 12: 270-271 (2001)

<http://www.jsbi.org/journal/GIW01/GIW01P014.pdf>



ポスター前に立つ堀本勝久氏

## GIW 2001 Report

### Christian Blaschke

This was the second time that I participated in the GIW and the meeting was at the same high standards of organization and scientific presentations than the last year.

I appreciated very much the stronger participation of foreigners this year and we can now say that GIW grew from a national workshop of bioinformatics to a fully international conference on genome informatics and computational biology, congratulations.

I found the two keynote speaks very interesting especially the one from Charles Lawrence that was completely new to me. He explained in a very clear way how the new experimental techniques used in molecular biology and genomics changed or research paradigm and that data can in fact induce new hypothesis that can than be tested.

It was also interesting to see that the analysis of interaction networks in different aspects (evolution of interaction networks, relation between gene fusion events and expression pattern, calculation of metabolic fluxes, comparison of interaction maps derived with different methods, ...) was reflected in a considerable part of the congress publications and the posters.

The acceptance rate dropped from about 60% last year to about 40% this year (if I remember the numbers correctly) what shows that it gets more difficult to publish at the GIW and the standards will be higher year by year. This is a very good indicator that GIW is on the right way to be one of the big conferences in this field (with ISMB and PSB) in Asia.

## GIW 2002 のお知らせ

GIW 2002 (The 13th International Conference on Genome Informatics)が次の要領で開催されます。

期 間:2002年12月16日(月)～18日(水)

場 所:The Garden Hall, Yebisu Garden Place, Tokyo, Japan

プログラム委員長:Richard H. Lathrop (University of California, Irvine, PC Co-Chair)

Kenta Nakai (University of Tokyo, Japan, PC Co-Chair)

ス コ ー プ:GIW 2002 is an international conference on genome informatics: computational analyses of genetic information. Its scope includes all work that is ultimately devoted to the computational understanding of biological systems on a molecular basis.

ホームページ:<http://giw.ims.u-tokyo.ac.jp/giw2002/>

連絡先:GIW Secretary Office

Email: [giw@ims.u-tokyo.ac.jp](mailto:giw@ims.u-tokyo.ac.jp)

Tel: 03-5449-5615

Fax: 03-5449-5442

Address: Laboratory for DNA Information Analysis, Human Genome

Center, Institute of Medical Science, University of Tokyo

4-6-1 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8639, Japan



# ISCBからのメッセージ



## Message from International Society for Computational Biology

### Philip Bourne

Let me begin by thanking JSBi for the opportunity to inform its membership of what is happening within the International Society for Computational Biology (ISCB). I sincerely hope this is the beginning of a long and fruitful interaction between the two organizations.

On January 21 I officially took over as President of ISCB from Russ Altman. My elected term is for one year. Joining me as elected members of the ISCB Executive Committee are:

Michael Gribskov (USA) Vice President ([gribskov@sdsc.edu](mailto:gribskov@sdsc.edu))  
 Anna Tramontano (Italy) Vice President ([Anna.Tramontano@uniromal.it](mailto:Anna.Tramontano@uniromal.it))  
 Barbara Bryant (USA) Secretary ([bryant@mpi.com](mailto:bryant@mpi.com))  
 David Rocke (USA) Treasurer ([dmrocke@ucdavis.edu](mailto:dmrocke@ucdavis.edu))

Our science is in a rapid state of growth and our platform for the coming year centers around serving our membership in this rapid growth phase. Regional groups, including JSBi are proliferating and ISCB has a role to play in fostering their development and yet at the same time doing everything we can to have our science be represented in a unified way to governments and society worldwide. As I write this I am attending the International Conference on Bioinformatics 2002 in Bangkok to understand the needs of this region and how ISCB can foster regional groups. What is clear is there is a huge future for bioinformatics in this region but they also have some of the same problems that plague all geographic regions, most notably insufficient trained personnel and yet a large number of scientists wishing to be trained in bioinformatics. In coming months we will be proposing initiatives to assist regional groups get established and to flourish as well as establish a more active educational program. I have asked Anna Tramontano to lead our regional affiliate's effort and Michael Gribskov to begin working on an educational program. The first step in both cases is to understand the scope of what is out there. We will shortly be making available an improved Web site at [www.iscb.org](http://www.iscb.org) which will include details of these efforts as they begin to unfold. Contributions to that Web site can be sent via email to [admin@iscb.org](mailto:admin@iscb.org).

Accompanying rapid growth is a more diversified science and the need for special interest groups (SIGs) to affiliate with the society in ways not dissimilar to regional groups. SIGs are an active and vital part of the Intelligent Systems in Molecular Biology (ISMB) conference, the official conference of the society, and a variety will be represented at this years conference in Edmonton Canada ([www.ismb02.org](http://www.ismb02.org)). I have asked Barbara Bryant to foster the development of formal relationships between the SIGs and ISCB.

Clearly these efforts require a professional and well organized society office, beyond that provided by the Executive Committee who are all volunteers with over demanding scientific jobs. A professional office requires funds and I have asked David Rocke as our new treasurer to explore fund raising opportunities, particularly through interactions with corporate partners.

In short we have a demanding agenda this year which can gain from a very close interaction with JSBi in which I know we share common goals. Our Executive Committee, our Board and our membership looks forward to this interaction and I encourage the membership of JSBi to contact us with ideas for joint initiatives.

## 学会議事録等

### ■ 日本バイオインフォマティクス学会第5回評議員会議事録

日 時：平成13年11月6日(火)10:00～12:00 場 所：国際観光会館 7F E-room

出席者：金久(会長&評議員)，江口(副会長)，小長谷，高木，麻生川，河合，菅原，諏訪，深川(評議員)，浅井，宮野(評議員&幹事)，有田，五斗(幹事)

## 報告及び議事

### 1.平成12年度収支決算報告他(配付資料)(金久会長より報告)

- ・平成12年度の収支決算はすでに会計監査にチェックされており、12月17日に予定している総会で報告する。
- ・収入的には賛助会員の会費が大きい。
- ・会員数の推移(配付資料参照)について説明があり、GIW期間中の入会者が多いことが報告された。
- ・平成13年度の収支についても前回総会時に報告した通りに進んでいるとの説明がなされ、会員収入は約600万円と報告された。

### 2.平成13年度活動状況報告

#### 今年度のGIWについて(宮野委員より報告)

- ・名称変更について:規模の拡大に伴い、Genome Informatics WorkshopからInternational Conference on Genome Informaticsへと名称を変更した。ただし、GIWという略称は残す。
- ・日程は12月17日(月)～19日(水)、17日は半日の2日間半。
- ・投稿論文数は50件あり(うち1件が取り下げ)、採択数は22件だった。海外からの投稿が増えた。
- ・ポスター発表に130件、ソフトデモに6件の投稿があり、会議に適切かどうかを編集で判断して採録通知を送った。
- ・学生への旅費支援の申し込みが数件あり、一人当たり5万円を支給する。海外のプログラム委員の参加旅費も一部サポートする。
- ・招待講演はDavid EisenbergとCharles Lawrence。
- ・来週中にもプログラムは完成予定。

#### Genome Informatics Vol. 12(学会誌)について

##### (宮野委員より報告)

- ・今年度は600ページ弱になる予定。
- ポスターが増加したことが原因なので会誌としてポスターを制限する必要があるかもしれない。
- フルペーパーとポスターを分けて2分冊にしてはどうかという意見が出た。
- CD-ROM化という意見も出たが、発表時の簡便さを考えると冊子体は必要。
- ただし、冊子体はCD-ROMに比べてコスト的にはかなり高くつく。
- 参加費を値上げする必要があるかもしれない。
- ・コピーライトについて:学会に帰属させてもらう。
- ・MEDLINE登録について
- 名称変更:Genome Informatics Seriesとなっているものを変更しようと問合せをしたが、不可能ということが判明。変更するためには新たに登録手続をし直す必要があるため、今回は名称変更は見送ることになった。
- このため、2000年分の登録がまだだが、早急に登録してもらう予定。
- 2001年分は11月中にもUniversal Academy Pressに渡す。

#### ISCBとの関係について(宮野委員より報告)

- ・GIWをISCBのリモートサテライトとして位置づける
- ISCBの会員には多少の割引をする
- ISCBのニュースレター等にGIWの案内を載せてもらう
- ISCBのホームページにJSBiへのリンクを付けてもらう
- ・Alfonso ValenciaにGIWでスピーチをお願いしてISCBの宣伝をしてもらう

→現在、ISCBの日本人会員は約30人。

#### ホームページ(会員専用)について(金久会長、五斗幹事より報告)

- ・論文集のHTML化について
  - ReferenceにMEDLINEのリンクを埋め込む。
  - URLやFTPのリンクを埋め込む。
  - TeXファイルをHTMLファイルに変換するプログラムや論文集の全文検索機能はプロトタイプが完成したが、変換作業は今後していく予定。
  - WordのファイルをTeXに変換するツールも同時に作成し、現在、GIW2001用に使用してもらっているところ。

#### ニュースレターについて(金久会長より報告)

- ・年2回の発行で第3号は既に発行済み。今年度中に第4号を発行する予定。

- ・第3号からフォントを少し小さくして経費を節約した(宮野委員)。

#### 協賛について(宮野委員)

- ・松原適塾
- ・神奈川科学技術アカデミー
- ・高校生のためのバイオインフォマティクス講習会

#### 3.研究会、およびワーキンググループの活動状況報告

##### 教育カリキュラム検討ワーキンググループ(小長谷委員より報告)

- ・現在、コアメンバーによる叩き台を作成中なので、完成したら評議員のメーリングリストに流し意見をもらう予定。
- ・すべてのバックグラウンドに対応するのは無理なので、どのようにするかは検討が必要。

- ・移り変わりが激しいので例えば10年先を見越したカリキュラムの作成が必要。

- ・米国での実態調査を別途予定する。

- ・ここでの成果は学会の存在意義にも関わり緊急性が高いため時期を決めて第一案を出してはどうか(宮野委員)

- 12/18の学会中に中間報告をする。

- 今年度中に印刷物・ホームページとしてまとめる。

- 有田幹事が大学院用のカリキュラム項目をまとめつつあるので、それを元に小長谷委員と会長で具体的な資料を作成していく。

- ・産総研の場合(浅井委員)

- on the job trainingとして開催しているものをまとめて、カリキュラムを作成する予定。

- ただし、専門家の養成には何か一工夫が必要になりそう。

- ・資格なども含めて産業用のガイドラインも必要(江口副会長)

- 資格試験の策定やポイント制度を学会主導で行ってもいいのではないか(有田幹事)

#### バイオインフォマティクス講習会

- ・ニュースレターで報告済みであるが、7月に2日間(HGCで講義、農工大で講習)を実施。

- ・昨年に比べると参加者は減った。

#### アレイインフォマティクス研究会

- ・かずさDNA研究所と共にバクテリアのアレイ研究ワークショップを開催。

#### バイオシミュレーション研究会

- ・鶴岡研究所のオープニングセレモニーとして共催

#### 4.役員選挙について

##### 評議員選挙

- ・半数の10名を改選する。正会員による投票で再選は認められない。
- ・会長により浅井、菅原、諒訪委員に選挙管理委員の依頼があり、承諾された。委員長は浅井委員にお願いすることになった。
- ・昨年と同様に参考資料として候補者リストを付けることになった。
- ・今年で任期の切れる評議員が一名づつ推薦する。
- ・ホームページ上でも候補者の推薦を受け付ける。

##### 日程

- ・11月中に評議員による候補者の推薦。
- ・ホームページ上の推薦締め切りは12/18前後。
- ・12月末に投票用紙発送。

・1月末に投票締め切りを設定。

会長は新評議員による選挙を行う。

副会長と幹事は新会長によって指名される。

#### 5.その他

##### 総会について

- ・12月17日のGIW初日に開催予定。
- ・出欠表及び委任状を近日中に発送予定。

##### 学術会議登録について

- ・3年に一度登録ができ、前回が1999年5月だったので、2002年が次回(第19期)。
- ・来年2月に募集説明会があるので宮野委員が参加予定。
- ・登録に必要な書類は説明会で分かるが、学会設立総会プログラム、活動状況、会員名簿などが必要になると思われる。会員名簿は今年度の事業費で12月以降に印刷物として発行する。
- ・メリットは会長が自動的に学術会議の会員になることと科学研

究費の推薦に関与できる。デメリットは特ないので、申請の方に向で進めることで了承された。

##### 学会の運営について

- ・現在の予算規模は約600万円で、賛助会員からの会費が大きな割合を占める。
- ・今後予算規模を拡大するためには賛助会員を増やす必要がある。
- ・賛助会員のメリットは、現状はGIWに一口一人無料招待だけ。
- ・GIWでの企業展示枠を拡大してはどうか(高木委員)。
- ・広告を出しやすくしてはどうか(有田幹事)。
- ・勉強会や学会の案内をまとめて、何らかの情報を付加してメーリングリストに流してはどうか(麻生川委員)。ただし、事務局を充実したり専任の幹事を置く必要が出てくるかもしれない。
- ・賛助会員一口5万円というのは安いので100社ぐらい集まって欲しい(江口副会長)。企業人同士で宣伝しあってはどうだろうか。
- ・ニュースレターで会員の研究活動を紹介するようなものがあってもよいのでは(諒訪委員)。

##### 配付資料

- ・平成12年度収支決算報告書
- ・会員数の推移
- ・第4回評議員会議事録
- ・第5回幹事会議事録
- ・平成13年度役員一覧
- ・賛助会員一覧

会長	金久 實	印
幹事	五斗 進	印

## ■ 日本バイオインフォマティクス学会第7回幹事会議事録

日 時：平成13年12月18日(火)12:00～13:30 場 所：恵比寿ガーデンプレイス

出席者：金久(会長), 江口(副会長), 浅井, 有田, 西川, 宮野, 五斗

### 報告及び議事

#### 1.カリキュラムについて

- ・カリキュラム作成の経緯と中身について有田幹事から説明があった。
- \*海外のシラバスを調査して、小長谷・八尾両氏と協議した。その結果、配列・構造・システムズバイオロジーの3本立てで構成することとした。また、リテラシーの重要性を考慮して、初級レベル、学部レベル、大学院レベルの3段階に分けた。
- \*配付資料は、これに加え、これまでに出ている教科書を調査してまとめた。どちらかというと情報よりの立場から集めたので、パターン認識や数理統計を前面に出す形となっている。
- ・カリキュラムについては、現在と異なる問題が出てきたときにも対処できる能力を付けるためのコースとすることが重要(宮野、金久)。
- ・企業人向けのトレーニングコースは、このカリキュラムとは別途に作成したほうがよい(金久)。
- ・カリキュラム構成の哲学や、基礎がどのように応用されているかの記述が最初にあるとわかりやすいのでは(江口)。
- \*これに関しては、最初に全体構成の図を付ける旨の補足が有

田幹事からあった。

- ・この報告を元に、1月頃執行部(幹事会)で再度集まって協議する。また、学会ホームページで公開して、会員からの意見を募る。その結果をふまえ平成13年度中に定稿として仕上げ、3月の新旧合同評議委員会で報告する。
- ・本カリキュラムのコピーライトと知的所有権は学会に所属するものとする。会員からのフィードバックは学会に来るようする。(jsbi@edelweiss.ims.u-tokyo.ac.jp宛て)。

#### 2.日本学術会議会員登録について

- ・次回の登録申請について宮野幹事から説明があった。
- \*次回(第19期)の登録は2月頃説明会があるが、説明書はまだ出ていないので配付資料は前回(第18期)のもの。
- \*平成14年に登録作業を開始し、15年に登録となる予定。
- ・要件の確認について。
- \*学会設立後3年が必要だが、関連事業としてのGIWを考慮すれば、おそらく大丈夫だろう。

\*関連分野は理学(構成員数300必要)または工学(同500必要)だが、現在の構成人数と専門を考慮すると理学が適当。研究連絡委員会をどの分野にするかは、今後検討する。

\*会員名簿を作成する必要がある。京都側事務局で作成する。  
・申請に必要なドキュメントは宮野幹事がイニシアチブを取って作成し、3月の評議委員会までにまとめて配付する予定。

### 3. その他

- ・評議員選挙について、現在、推薦候補者が10名なので、もう少し増やす。特に女性を増やしたほうがいい。
- ・Oxford University Press Prizeについての説明が宮野幹事よ

りあった。

\*今回は時間がなかったため、表彰規定を作成できなかったが、3月の評議委員会までに作成して報告する予定。

### 配付資料

- ・バイオインフォマティクスカリキュラム中間報告(未定稿)
- ・日本学術会議会員選出制度説明書

会長 金久 實 印  
幹事 五斗 進 印

## ■ 平成13年度日本バイオインフォマティクス学会総会

日 時：平成13年12月18日(火)16:00～16:30 場 所：恵比寿ガーデンプレイス恵比寿ガーデンホール3階 参加人数：約100名  
議 案：第1号 平成12年度事業報告 第2号 平成12年度収支決算  
第3号 平成13年度事業計画および中間報告 その他、報告 バイオインフォマティクスカリキュラムについて

### 平成12年度事業報告

#### 1. 年会・総会・評議員会・幹事会

- 年会(12月18～19日、東京・恵比寿ガーデンプレイス)
- 総会(12月18日、東京・恵比寿ガーデンプレイス)
- 平成12年度第1回評議員会(4月26日、東京・国際観光会館)
- 平成12年度第2回評議員会(10月25日、東京・国際観光会館)
- 平成12年度第3回評議員会(3月27日、東京・国際観光会館)
- 幹事会(評議員会と同日、及び年会時に開催)

#### 2. 研究会・ワーキンググループ

- アレイインフォマティクス研究会
  - 第1回：6月16日(東京大学医科学研究所ヒゲノム解析センター)
  - 第2回：8月28日(東京大学医科学研究所本館講堂)
- バイオシミュレーション研究会
  - 第1回：7月15日(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)
- 教育カリキュラム検討ワーキンググループ
- 一般向け講習会ワーキンググループ

第5回バイオインフォマティクス講習会：7月24日

(東京大学医科学研究所ヒゲノム解析センター)

#### 3. ニュースレター

- 第1号(2000年7月)
- 第2号(2001年3月)

#### 4. 協賛・後援

- CBI ミレニアムシンポジウム、東京(2000年7月26～28日)
- 財団法人神奈川科学技術アカデミー教育講座、東京(平成12年度第Ⅱ期)
- 日本進化学会第2回大会、東京(2000年10月7～9日)
- ICSB2000:The First International Conference on Systems Biology, Tokyo (November 14-16, 2000)
- 国際高等研究所情報生物学適塾集中トレーニングコース、けいはんな(2001年3月24日～4月11日)

### 平成12年度収支決算報告

(平成12年4月1日～13年3月31日)

#### [収入の部]

前期前受金	2,293,000
12年度会費	1,290,000
12年度賛助会費	3,450,000
12年度入会金	258,000
受取利息	1,060
雑収入	10,000
GI誌代	20,000
前期繰越	△29,031
当期収入合計	5,000,029

#### [支出の部]

会議費	93,400
旅費交通費	71,900
ファクシミリサービス	15,120
郵便局手数料	9,780
通信運搬費	307,834
クレジット手数料	25,980
セキュアサーバID発行費	85,365
ニュースレター制作費	988,155
講習会費	30,062
備品費(FAX機)	281,505
事務費	32,520
ドメイン登録料	10,241
GIW学生旅費援助	100,000
Genome Informatics誌代	150,570
GIW会場費	813,138
次期繰越	1,984,459
当期支出合計	5,000,029

前受金	
13年度会費	617,000
13年度賛助会費	1,650,000
12年度決算	
次期繰越	1,984,459
合計	4,251,459

平成12年度財産報告(平成13年3月31日現在)	
第一勵業銀行伏見支店(普)	3,125,706
郵便口座	1,022,550
現金	103,203
合計	4,251,459

上記の通り報告します。

平成13年3月31日

監査の結果、上記の通り相違ありません。  
平成13年7月5日

会計 本吉 美智瑠 印

会計監査 中西 憲之 印  
会計監査 高井 貴子 印

## 平成13年度事業計画および中間報告

### 1. 総会・評議員会

13年度総会：平成13年12月18日(恵比寿ガーデンプレイス)

13年度第1回評議員会：11月6日(東京・国際観光会館)

13年度第2回評議員会：2002年3月に開催予定

#### ・研究会活動

アレイインフォマティクス研究会

第3回：8月29日(かずさDNA研究所)

バイオシミュレーション研究会

第2回：10月19～21日(慶應義塾大学)

一般向け講習会ワーキンググループ

第6回バイオインフォマティクス講習会：7月20～21日

(東大医科研、東京農工大学)

#### ・機関誌編集

学会誌としてニュースレター第3号(10月)を発行

第4号は2002年1月に発行予定

#### ・協賛・後援

国際高等研究所情報生物学適塾集中トレーニングコース

(3月24日～4月11日、けいはんな)

ICBP2001(7月30日～8月3日、京都)

並列生物情報処理イニシアティブ・シンポジウム(11月30日、東京)

(財)神奈川科学アカデミー教育講座(11月27日～12月8日、東京)

第2回国際高等研究所情報生物学適塾集中トレーニングコース

(2002年3月～4月)

## 平成14年度事業計画

### 1. 総会・評議員会・幹事会

総 会(年会時12月に予定、恵比寿ガーデンプレイス)

評議員会(7月と3月に予定、於東京)

幹 事 会(評議員会と同日、及び年会時)

### 2. 選挙

会員による評議員選挙(1月)

評議員による会長選挙(3月)

会長による幹事の指名(3月)

### 3. 年会

年会(12月に予定)

学生の旅費援助

### 4. 研究会・ワーキンググループ

アレイインフォマティクス研究会

バイオシミュレーション研究会

一般向け講習会ワーキンググループ

(バイオインフォマティクス講習会)

### 5. ニュースレター

7月と1月に2回発行

### 6. 学術会議登録

### 7. 國際対応

ISCBとの協力

## 評議員選挙結果

氏 名	所 属
阿久津 達也	(京都大学化学研究所)
矢田 哲士	(東京大学医科学研究所)
松田 秀雄	(大阪大学大学院基礎工学研究科)
高井 貴子	(東京大学情報理工学部)
西岡 孝明	(京都大学大学院農学研究科)

氏 名	所 属
後藤 修	(産業技術総合研究所)
岡本 正宏	(九州大学大学院農学研究科)
大山 彰	(株式会社ザナジェン)
木寺 詔紀	(横浜市立大学大学院総合理学研究科)
佐藤 賢二	(北陸先端科学技術大学院大学)

# 学会の現況

## 日本バイオインフォマティクス学会平成13年度役員一覧

会長	金久 實（京都大学化学研究所バイオインフォマティクスセンター）	任期 H13.4.1～H14.3.31
副会長	江口 至洋（三井情報開発株式会社）	
会計監査	高井 貴子（東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター） 中西 憲之（田辺製薬株式会社）	
幹事	浅井 潔（産業技術総合研究所生命情報科学研究センター） 有田 正規（産業技術総合研究所生命情報科学研究センター） 五斗 進（京都大学化学研究所バイオインフォマティクスセンター） 西川 哲夫（株式会社日立製作所） 宮野 悟（東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター）	
評議員	浅井 潔（産業技術総合研究所生命情報科学研究センター） 金久 實（京都大学化学研究所バイオインフォマティクスセンター） 久原 哲（九州大学大学院生物資源環境科学研究府） 小長谷明彦（北陸先端科学技術大学院大学） 高木 利久（東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター） 富田 勝（慶應義塾大学環境情報学部） 中村 春木（大阪大学蛋白質研究所） 美宅 成樹（東京農工大学工学部） 宮野 悟（東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター） 森 浩祐（奈良先端科学技術大学院大学）	任期 H13.4.1～H14.3.31
	浅田起代蔵（宝酒造株式会社） 麻生川 稔（日本電気株式会社） 梅山 秀明（北里大学薬学部） 荻原 淳（グラクソ・スミスクライン株式会社） 河合 隆利（エーザイ株式会社） 菅原 一秀（日本IBM株式会社） 諫訪 牧子（産業技術総合研究所生命情報科学研究センター） 西川 哲夫（株式会社日立製作所） 深川 浩志（インテックW&Gインフォマティクス株式会社） 松尾 洋（理化学研究所ゲノム総合科学研究センター）	任期 H13.4.1～H15.3.31

## 賛助会員一覧(平成14年1月20日現在)

#会員番号	会社名	#会員番号	会社名	#会員番号	会社名
C0001	株式会社ユーバーサル・アカデミー・プレス	C0015	宝酒造株式会社	C0027	株式会社日立製作所
C0002	サン・マイクロシステムズ株式会社	C0016	ドラゴンジェノミクス株式会社	C0028	アマシャムバイオサイエンス株式会社
C0003	日本SGI株式会社	C0017	明治製薬株式会社	C0029	株式会社マホレックス
C0004	CTCラボラトリーシステムズ株式会社	C0018	第一製薬株式会社	C0030	アクセルリス株式会社
C0005	田辺製薬株式会社	C0019	塙野義製薬株式会社	C0031	日本新薬株式会社
C0006	グラクソsmithkline株式会社	C0020	株式会社富士通九州システムエンジニアリング	C0032	日本オラクル株式会社
C0007	コンパックコンピュータ株式会社	C0021	武田薬品工業株式会社	C0033	三井情報開発株式会社
C0008	山之内製薬株式会社	C0022	三井物産株式会社	C0034	旭化成株式会社
C0010	株式会社シーティーアイ	C0023	三共株式会社	C0035	サントリー株式会社
C0011	アプライドバイオシステムズジャパン株式会社	C0024	エーザイ株式会社	C0036	中外製薬株式会社
C0012	大日本製薬株式会社	C0025	大鵬薬品工業株式会社	C0037	株式会社ジーエヌアイ
C0014	藤沢薬品工業株式会社	C0026	富士通株式会社		



編 集 後 記

私にとって今年度一番印象に残った仕事は、やはり昨年12月に開催されたGIW2001です。裏方として初めてGIW運営のお手伝いをさせていただいたのですが、今回は700人を超える参加者が集まり、その規模の大きさと当日の忙しさは私の想像を遥かに越えたものでした。最初は緊張していましたが、そんな初々しい緊張感もすぐ忙しさにかき消され、気が付くと会場中を走り回っていた3日間。国際会議という活気ある雰囲気を肌で感じることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。思えば昨年3月頃からこの

GIW2001の準備を始め、12月の会議当日までにはいろいろな事がありました。しかし、無事に幕を閉じた時には今までの疲れや長かった準備の苦労も一気に吹き飛びました。次回はどんな経験ができるのか今から楽しみです。

このニュースレター担当になってから早や7ヶ月。まだまだ至らない点もあるかと思いますが、来年度も宜しくお願ひいたします。ご意見・ご感想、掲載してほしい情報等がございましたら編集担当(E-mail: jsbi@edelweiss.ims.u-tokyo.ac.jp)までお願いいたします。(M.K)